

# 肥前長崎地方の存在動詞「アル」の用法

愛 宕 八 郎 康 隆

## はじめに

この小稿は、肥前長崎地方の、いわゆる存在動詞「アル」の、多様、多彩で特徴的な、その用法について述べようとするものである。

形式動詞とも言われる「アル」動詞が、古くから日本語表現に、ユニークな寄与を見せてきたことは、春日和男氏の「存在詞に関する研究」——ラ変活用語の展開——（風間書房刊、43・7）に徴しても、その一斑を知ることができる。

国語方言上の「アル」に着目する時、例えば、北陸道方言や中国方言などにくらべて、九州域は、たしかにその用法上、とかく特色を見せがちのように思われる。

郷土北陸での10数年の生活、続いての広島での18年、さらに、現長崎での14年を通じて、筆者は生活体験的に、長崎地方の「アル」動詞の用法の特異性に興味を覚えるものである。

今、長崎地方の「アル」動詞の用法を見ていくにあたって、

### I 「アル」顕在の用法

#### II 「アル」内在の諸事象

に、たてわけて扱うことにする。

### I . 1

長崎地方には、もとより、

○ミツツ アル ワケ タイナ。(地所は)三か所あるわけよね。(老男→中男)〈三重〉

○ペーロンバ ミタ コト アッ トー。ペーロンを見たことがあるの。(中女→少女)

〈小口〉

などのような、「アル」の言わば一般的用法とも言えるものも見られるが、当地方には、

○イマ ナンジ アル ヤ。今、何時ですかね。(中男→青男)〈川棚〉

○イマ ナンジ アッ トネ。今、何時ですかね。(中女→同)〈長崎〉

○イマ ナンジ アイ カン。今、何時ですか。(青男→中男)〈野母崎〉

などのように、時刻を尋ねる場合や、それに答える場合の

○イマ ゴジグライ アル。今、5時頃です。(中男→同)〈長崎〉

○モー ジューニジ アッタ モン<sup>ノ</sup>ー。もう12時だったものねえ。(中女→同)〈大崎〉

などでの、「アル」の特異な用法が、まず注目される。

このような「アル」の用法は、県下に広く見られる。

### I . 2

次には、

○ドーカ アル トネ。どこかぐあいが悪いのね。(中女→少女)〈長崎〉

○ドンナ アルー。ぐあいはどんなです。(中女→少女)〈長崎〉

○ドンナニ アル ネー。ぐあいはどんなですかね。(中女→少女)〈長崎〉

○ドゲン アル ネー。ぐあいはどんなかね。(中女→少男) <長崎>

○ドギャン アル。ぐあいはどんなです。(中男→同) <手熊>

など、一連の表現での「アル」の用法が取り上げられる。これらは、いずれも相手の健康状態とか病状について問いかける表現であるが、

○イブ ドーカ アル。胃のぐあいがどうもおかしい。(青男→中男) <長崎>

○ドーカ アルゴタッ。どうも体調がおかしい。(中男→中女) <長崎>

などは、自己の体調をいぶかる表現である。

これらは、いずれも、「アル」が、「ドーカ」、「ドンナ」、「ドンナニ」、「ドゲン」、「ドギャン」など、一連の、いわゆる疑問詞との相関において用いられるのが特色である。

### I. 3

「アル」はまた、次のような、開き直りやたしなめ気分の、いわゆる反語表現に用いられる。一連の表現では、

○ドー アン ナ。ヨンニュ シャベラントガ。いいではないか。よく喋らないのが。

(中女→同) <小口>

○ニサンプングライ オキトツタツチャー ドー アッデス カ。2, 3分位起きていたってどうですか。(中女→中男) <長崎>

○ソゲン ユータツチャー ドガン アル ネー。そんなに言ってもしょうがないではないか。(中男→同) <手熊>

○ドーガン アッ モンカー。どうもないではないか。(中男→青男) <大崎>

などのように、「ドーアル」、「ドガンアル」の形式を基調としながらも、一方ではまた、

○サンカ ドコノ サワギジャ アン モンネー。寒いどころの騒ぎであるものか。(中女→同) <茂木>

○イカンテ アル モンデス カー。行かないってあるものですか。(中男→中女) <長崎>

などのように「～アルモンネ」、「～アルモンデスカ」のような形式も見られる。

○オンナノコガ ノミニ イクツテ アル ネ。女の子が(酒を)呑みに行くってあることかね。(中女→青女) <長崎>

は、「ドー」、「ドガン」などの疑問詞や特定の文末詞「モンネ」をも取らずに、反語表現として立っている特異例である。

ともあれ、これら一連の表現は、その述部が、末尾の「アル」に導かれているのが注目される。

### I. 4

次いでは、中称の指示語のもとに表われる、次下のような、「アル」の用法が目をはく。

○ソングン アットデス ヨ。そんなにあるのですよ。(中男→同) <長崎>

○ソガン アットジャンパー。そんなにあるのですよ。(老女→青男) <加津佐>

○ソガン アルゴト アル。そんなようです。(中男→中女) <長崎>

などは、相手の発言に同意する表現であり、

○アンタワ ドーシテ ソンナ アル トー。あんたはどうしてそんなわがままなの。(中女→少女) <長与>

○イツマデ ソンナ アッ トネ。いつまでそんなにしているのね。(中女→少男) <長崎>

などは、母親が、わが子をたしなめる表現であり、

- ソ<sup>ガ</sup>ン アレバ ヨカ<sup>バ</sup>ッテ。そういうふうにあったらいいけれど。(中男→青女) <長崎>  
○ソ<sup>ー</sup> アレバ ヨカ<sup>ッ</sup>デスケド <sup>ネー</sup>。

などは、相手の発言を受けての期待の表現である。

- ソ<sup>ゲ</sup>ン アッ<sup>シ</sup>ェン ツン<sup>ア</sup>ーテ イク<sup>ゴ</sup>ト ナカ ト<sup>タ</sup>。そんなふうだから一緒に連れだっ行って行きたくないのよ。(中女→同) <式見>

これもまた、相手の発言を、「ソゲン アッシェン」で受けて始まる表現である。また、

- ソ<sup>ー</sup>ニ アロ<sup>ー</sup>。そうでしょう。(中女→老女) <式見>

は、後述(Ⅱ.4)の「～ニコ」の原形を思わせる用法として注目される。

以上のものは、形式上、「ソゲン アル」、「ソゲン アル」、「ソガン アル」、「ソナ アル」、「ソー アル」、「ソーニ アル」などのように、中称の指示語のものと、「アル」動詞の展開の見られるところに特色がある。

### I.5

続いては、

- グ<sup>ア</sup>イノ ワル<sup>ー</sup> アル。体のぐあいが悪い。(中女→同) <長崎>  
○ヨ<sup>カ</sup> ナギ<sup>デ</sup> ユー アリ<sup>マ</sup>シター。よい屈でようございました。(中女→中男) <小口>  
○ア<sup>レ</sup>ガ テ<sup>ヤ</sup>スー アル モン<sup>デ</sup>スケン <sup>ナー</sup>。あれが便利なものですからねえ。(老女→青女) <子々川>  
○タ<sup>ッ</sup>シャニ アリ<sup>マ</sup>シター。元気でいましたか。(中女→中男) <平戸>

などのように、形容詞・形容動詞の連用形を受けて、「アル」動詞の展開するものが取り上げられる。

この表現形式は、かならずしも、肥前長崎地方に特有というものではなく、例えば、広島地方での、「オマメナラ ヨロシュ アリマス。」(お元気でしたら結構でございます。)などに、その形式を見ることができ、今はこの形式を、当地方での「アル」動詞の幅広い活躍の中に位置づけてみることに、一定の意義があるものとする。

### I.6

- ヒ<sup>ド</sup>ー サ<sup>ン</sup>カロソーニ アリ<sup>マ</sup>ス <sup>ト</sup>サ。ひどく寒そうにありますよ。(老女→青女) <子々川>  
○ウ<sup>マ</sup>カロソーニ ア<sup>ッ</sup>タ <sup>ザー</sup>。おいしそうだったわよ。(中女→同) <宮浦> ((上野智子氏報告例))  
○フ<sup>ッ</sup>ソン ア<sup>ッ</sup>テ <sup>ハ</sup>ヨ イコ <sup>デ</sup>ナ。雨が降りそうだから早く行こうよね。(中男→同) <崎山>

これらは、いずれも表現の中核に、「～ソーニ アル」の様態表現形式の見られるもので、共通語ないしは諸他の方言では、「～ソーデス」、「～ソーダ」・「～ソージャ」、「～ソーヤ」などのような断定形式で表現する傾向の中にあって異色である。

- 虫とりをして田んぼからかえるときたんぼが高く高くのびて風のながれにのってとんでいました。したには黒いたねがおもたそうにありました。(長崎大学附属小学校2年4組吉田修君。

55.6.1.「発見のカード」より)

土地の小学生の文章表現に「おもたそうにありました」のような形式が表われるのも、あ

わせて注目される。

### I.7

次には、「～テアル」形式のものを見る。この形式は、福岡県下中心に、例えば、

○キ<sup>ア</sup>ー キ<sup>テ</sup> ア<sup>ツ</sup>タ。昨日いらっしゃってました。(老女→中男) <福岡市>

○チ<sup>ョ</sup>ーヒバ アツメヨッテ ア<sup>ツ</sup>タ<sup>ヨ</sup>ー。町費を集めていなさったよ。(少女→中女) <柳川市沖端>

○ア<sup>フ</sup>ヒト イマ<sup>ド</sup>コニ イッテ アル<sup>下</sup>。あの人は今どこに行っていらっしゃるの。  
(青男→中男) <佐賀県神崎町>

などのように、軽い敬語法として、比較的よく行なわれているが、当長崎地方では、この形式は振わないように見受けられる。

○オナカ コワシテ ミルクバ ノミキラン ヒトワ オチャバ モッテ クッゴト  
ユーテ ア<sup>ツ</sup>ツバ。おなかをこわして牛乳を飲めない人はお茶を持ってくるように言っているの。  
(老女→青女) <子々川> ((アクセント欠))

○ジューロクグライジャ アーター モ ムカシカル ユーテ アル ヤレー ドケニ  
ヤ……。16才ぐらいではあなたもう昔から言っているやれどこには……。 (老男→老女)  
<有家> ((全国方言資料第6巻, P195))

などの「ユーテ アル」,

○ソケ カイ<sup>テ</sup>チャットバ ヨン<sup>ミン</sup> ネ。そこに書いてあるのを読んでみるよ。(中男→青女)  
<茂木>

の「カ<sup>イ</sup>テ ア<sup>ツ</sup>ツバ」からの「カイ<sup>テ</sup>チャットバ」などの例に接することはできるが、これは微弱で、しかも、敬語法としては立っていない点が留意される。

### I.8

次には、「～ゴト アル」の形式が取り上げられる。県下一般には、後述(II.1)の、一語の助動詞としての「ゴタル」が盛んであるが、その中であって、二語分離形の「～ゴト アル」も随所に聞かれる。

○ソガ<sup>ン</sup> ユー<sup>ダ</sup> コトモ ア<sup>ツ</sup>タゴトモ ア<sup>ツ</sup>タ<sup>ネ</sup>ー。そんなに言ったこともあったようにもあったねえ。(老女→青女) <子々川>

の文例では、その二語性は明白である。

この「ゴト アル」形式は、比喻や引用、例示のほか、多くは、

○ツ<sup>ラ</sup>ノ ナンカ<sup>ゴ</sup>ト アイ<sup>ヨ</sup>ー。顔が長いみたいだよ。(老男→老女) <三重>

○ゾ<sup>ー</sup>ノゴト アル<sup>デ</sup>ス ナ<sup>ー</sup>。そんなようですねえ。(中男→同) <黒崎>

○ボンゴロニャー カ<sup>エ</sup>ッテ クル<sup>ゴ</sup>ト イーヨ<sup>ツ</sup>タゴト ア<sup>ツ</sup>タ<sup>デ</sup>スバ<sup>ッ</sup>テ ナ<sup>ー</sup>。  
盆の頃には帰って来るように言っていたようにありましたがねえ。(老女→中男) <平戸>

などのような不確かな判断を示す表現に用いて、土地人はこれを重宝している。なお、

○キョ<sup>ー</sup>モ テ<sup>ロ</sup>ゴト ア<sup>リ</sup>マス ナ<sup>ー</sup>。今日も照りそうですねえ。(中女→同) <小口>  
は、天候を主体に仕立てての、その意志を表現した形をとっており、直訳的には、<sup>〃</sup>今日も照りたいようですね。、ともなり、ユニークな表現法と言えよう。

### I.9

「アル」動詞はまた、

- イマ ジュンピタイソノ アリオッ トター。今準備体操があっているんだよ。(中女→少男) <小口>
- コメ フ ツーチョノ アイオッタッ サ ネー。米の通帳があっていたのよねえ。(中男→青女) <福田>
- ムカシャ ズーッ アイヨッタケン ネ。昔はずっとあっていたからね。(老男→青女) <子々川>
- ヒット フタツ アイヨット ネ。(夜と) 昼と二つあっているんよね。(老男→中男) <茂木>

などのように、述部末に「アリオル」, 「アリオル」の形式で、状況の進行態表現に、特色ある参加を見せている。

## I .10

次には、状態敬語法とも言うべき表現法にかかわる「アル」動詞の活躍が注目される。

- オハ オー オアリヤシタ。おはようございます。(老女→中女) <志原>
  - トノサマトシテ カクシキノ オ アランヨーニ ナツテカラー……。殿様としての格式がおなくなりになってから……。 (老女→中男) <平戸> ((アクセント欠))
- などは、「アル」に接頭辞の「オ」を配して状態敬語としているもの。

- ヒマジャ アラッサン トサ。(おばあさんは) 暇ではあられないのよ。(老女→青女) <子々川>
  - トラユクドンガエン ニクジャ アラッサン ト。寅さんの家の近くではあられないの。(老女→青男) <木指>
  - オーキュー アラス。(体が) 大きくあられる。(中女→中男) <佐世保>
  - ダリデ アラス トキャ。どなたであられるのかね。(老女→青女) <鹿町>
- などは、「アル」に、「シャル」系の「ス」を添えて、巧みに、手軽な状態敬語法を仕立てているものである。
- ワ ルー アンナサルラシカ。悪うあられるらしい。(中女→同) <大村>
  - チー タ ミミ フ トー アンサン ナ ダー。少し耳が遠くありなざるねえ。(中男→老男) <福田>
  - インガ シュー アン ナットデ ショー。忙しくあられるのでしょうか。(中女→中男) <長与>
- などは、「アリナサル」を原形とする諸事象例であり、
- オ バチャンノ ワル アン ナスソー デ ゴシンパイデ アン ナスデ ショー。おばあちゃんのごあいが悪くあんなさるそうでご心配でありなさいませう。(中女→同) <小口>
  - オンマレ フ トコ デ アン ナス ト。お生まれはどこでいらっしゃいますの。(老女→中男) <宮浦>

などは、「アリナサリマス」を原形とする諸事象例であるが、先の「アラス」を低い状態敬語法として、この「アリナサル」, 「アリナサイマス」諸事象が、一段上位の状態敬語法を仕立てている。

このように、「アル」動詞は、状態敬語法の表現に、巾広い寄与を見せている。

さて、これまでに取り上げてきた、I .1~I .10までの諸事象以外に、なお注目すべきものが見られる。

- モ ラオー テ オモ タ モ ナ イッ シュー カン チャ コン バジ ャ モ ン ネ。モー ドー

アッテン モラオーテ オモエバー。(嫁を)貰おうと思った者は一週間でもやって来なければだめだものね。もうどうしても貰おうと思えば。(老男→老女)〈小口〉

○ドガアッテン イカンパー。どうしても行かなければ。(中女→中男)〈南串山〉  
 などで「ドーアッテン」、「ドガアッテン」は、それぞれ、「どうあっても」、「どがんあっても」からのもので、「アル」動詞顕在とは言っても、これは、もはや一語の副詞として立っているものである。

○アランバ コマル ト。なくては困るの。(老男→中男)〈長崎〉  
 のような事例に接するにつけ、当地方が、いかにも、「アル」動詞を自在に駆使する土地柄であるかを思わせられる。また、

○ユー マタ ウリバツカイ アッテ ネー。よくまあ雨ばかり降ってねえ。草などばかり生き生きして。(老女→同)〈福田〉

などにもまた、その「アル」動詞の自在な運用を見ることができる。

以上、存在動詞「アル」顕在の用法を、1～11にわたって見てきたが、その用法は、まことに多彩かつ自在と言うことができよう。

## II. 1

「アル」動詞はまた、内在の形で諸事象を形成している事態が注目される。

まず最初に、「ゴタル」が取り上げられる。これは、先の I. 8 の「ゴト アル」の熟合形としてとらえられるもので、県下一般には、「ゴト アル」よりも、この「ゴタル」形がよく行なわれている。

○マドロシユーシテ モ ヨカッテ ユーゴタル。まどろっこしくてもうよいて言いたいくらいだ。(中女→中男)〈平戸〉

○カワイソカゴタルデス バイ。かわいそうなくらいですよ。(老女→青女)〈子々川〉

○ナミダノズツゴタッデス バイ。涙が出そうですね。(老男→中男)〈大崎〉

などは、程度・度合の表現例であり、

○ヤネノゴタル トヤ。屋根のようなのかい。(少男→老女)〈鹿町〉

○キチゲーノゴタッ。気ちがいのような。(老男→中男)〈茂木〉

などは比喻の、また、

○マーダ コンゴタッ フー。まだ来ないようだねえ。(中男→同)〈黒瀬〉

は、不確かな判断の表現例であるが、土地人は、この「ゴタル」を巧みに、よく使いこなしている。「アル」動詞は、この「ゴタル」助動詞の形成に大きく寄与している。

## II. 2

「ゴタル」に次いで、「ジャル」が取り上げられる。

○コートーカチ ユートガ ヨネン アッタツジャル モン。高等科というのが4年あったのなもの。(老女→青女)〈子々川〉

○ミミ トーカッター メーガ オロミエタリ サス モンジャルケン。耳が遠かったり目がぼんやり見えたりなされるものだから。(老女→青女)〈子々川〉

○イカン モンジャルケン フー。行かないものだからねえ。(老男→中男)〈宮浦〉

○ソースレバ ヤッパリ ア トーウスジャルケンカー コメワ クダケテデス ナー。そうすればやっぱり、あ、唐臼だから米は碎けてですね。(老男→老女)〈小口〉

などの諸例のように、当地方の「ジャル」は、多く、「～ジャルケン」、「～ジャル モン」の慣用形で見い出される。

この「ジャル」を今、「 DEAL」 出自のものとするならば、ここにも、「ジャル」助動詞への、「アル」の寄与を見ることができる。

いわゆる断定の助動詞「ジャ」の保有域では、一般に、その連体形を欠き、終止形は「ジャ」であるが、当地方では、終止・連体両形とも、とかく脱落や変容を見せやすい「ル」音をとどめての「ジャル」であるところに特色があり、「アル」動詞の内在を、よく見て取ることができる。

### II. 3

続いては、いわゆる形容詞の「カリ活」形のものが取り上げられる。

○ウーカロー ラー。 ネ。多いだろうよね。ねえ。(老女→青女) <式見>

○サンカロゴト シトッ。寒そうにしている。(老男→中男) <子々川>

○ウマカロ カイ。 コリヤ。おいしいだろうか。これは。(老女→中女) <黒瀬>

○オカーサンノ サビシカロー ダー。お母さんがさびしいだろうよ。(老女→中男) <三重>  
などの「ウーカロ」、「サンカロ」、「ウマカロ」、「サビシカロ」は、その未来形であり、

○ヨッポト ウンノ ツヨー ナカランバ アガランデス ネ。よほど運が強くないとあがりませんね。(青女→中女) <大崎>

の「ナカラ」は未然形、

○ミカン マチーット タツカラ ヨカンジョン。みかんがもう少し高いといいのだが。(老男→同) <小口>

の「タツカラ」は假定形、

○タツシャカイソン シトラシタ ナイ。達者そうにしておられましたね。(老女→中男) <加津佐>

の「タツシャカイ」は、「タツシャカリ」からのもので、連用形というぐあいに、いわゆる「カリ活」形式の諸活用形を見ることができる。

この「カリ活」の出自を、形容詞のク活、シク活の連用形に、存在動詞「アリ」の添った、「～クアリ」、「～シクアリ」とするならば、ここにもまた、「アル」動詞の強い参加が認められる。

おしなべて、九州地方では、いわゆるカ語尾形容詞がよく行なわれているが、別して肥前地方は、これが盛んである。このようなカ語尾形容詞の盛行も、上に述べた「カリ活」事象の情況に照らして首肯されることであろう。

### II. 4

最後に、「ニロ」が取り上げられる。

○モー トシオレン ナレバ アナタ メーワ ミエワ シェージ ミント ユエバ  
ツンベェ ナルシ チンテ ユエバ ヨカ モンニロ バーカト イッショデヒ ト。  
もう年寄りになれば目は見えないうし耳はと言えつんぼになるしなんと言ったらいいのだろうか馬鹿といっしょですよ。(老女→青男) <木指>

○アスケ ニモツバ オイトツタバツテ ヨカッタニロ。あそこに荷物を置いておいたけれ

どよかったのだろうか。(中女→同) <平戸>

○向フカル来ルトア誰ニロ分ラン ((純壱岐島方言集, 山口麻太郎, 第四章助詞))

のように用いられる「ニロ」であるが、これは先に見た「ソニ アロ。」(I.4)の「ニアロ」の縮化になるものと考えられる。壱岐島にもある、この「ニロ」を、山口麻太郎氏も、その著「壱岐島方言集」で、「ニアロ」出自を説いておられる。

「ニロ」は、県下に、さして盛んではないが、これが、「ニアロ」からのものとするならば、ここにも「アル」動詞未来形の参加を指摘することができる。

### おわりに

以上、<sup>3</sup>肥前長崎地方の存在動詞「アル」の用法、と題して、「アル」顕在の用法と「アル」内在の諸事象とにたて分けて、「アル」動詞の用法を見てきた。

「アル」顕在の用法では、時刻を問いかける、「ナンジアル」の用法、体調などを問う、「ドーカル」の用法、また反語表現を導く、「ドーアル」の用法、相手の発言をうべなう、「ソングエンアル」の用法、あるいはまた、「グアイノワルーアル」のような形容詞連用形を修飾部にとる用法、さらには、「～ソニアル」、「～テアル」などの用法、それに、「～ゴトアル」や「～アリョル」の用法、加えて、「オアル」、「アラス」、「アンナサル」、「アンナス」など、一連の状態敬語法での用法など、多彩な用法が見られた。

さらに、「アル」内在の諸事象ということでは、「ゴタル」、「ジャル」、「形容詞のかり活」、それに「ニロ」などが関係事象として取り上げられた。

このように、肥前長崎地方の方言表現には、存在動詞「アル」の多様な、市広い参加が認められ、これが、当地方言の一つの特色をなしていることは、北陸人としての筆者が強く感じるところである。

このように、「アル」動詞を多様自在に運用する事態を、今、発想傾向ということにとらえて見ると、共通語や諸他の方言では、多く断定法をとるのに対して、とかく状態本位の表現としがちな傾向を指摘することができる。すなわち、

- 〴〵何時ですか、を 〴〵ナンジ アル、に
- 〴〵どうですか、を 〴〵ドーカ アル、に
- 〴〵そんなに言ったって、どうですか、の
- 〴〵どうですか、を 〴〵ドー アル、に
- 〴〵そうです、を 〴〵ソングエン アル、に
- 〴〵うまそうです、を 〴〵ウマカロソニアル、に

などというぐあいである。これらに限らず、とかく状態本位の表現に取りなそうとする傾向が認められる。

このような、存在動詞「アル」を駆使しての、状態本位の表現に取りなす土地柄の根深さ、好みの根深さ——古態性——は、諸他の方言では、イ語尾形容詞を支持しているのに対して、当地方では、強くカ語尾形容詞を支持している事態にも、これを見ることができるようになる。

かくして、当地方における、上述のような特徴傾向は、ひとり、肥前長崎地方方言の特色にとどまらず、九州方言の基質にかかわる、注目すべき、一事態とすることができよう。



## ★地点対照表

- <志原>……杵岐郡郷ノ浦町志原  
<崎山>……福江市崎山町  
<鹿町>……北松浦郡鹿町  
<川棚>……東彼杵郡川棚町  
<黒瀬>……西彼杵郡大島町黒瀬  
<黒崎>……西彼杵郡外海町黒崎  
<小口>……西彼杵郡琴海町尾戸郷小口  
<宮浦>……西彼杵郡西彼町宮浦  
<子々川>……西彼杵郡時津町子々川  
<長与>……西彼杵郡長与町  
<野母崎>……西彼杵郡野母崎町  
<木指>……南高来郡小浜町木指  
<南串山>……南高来郡南串山町  
<加津佐>……南高来郡加津佐町  
<三重>……長崎市三重町  
<式見>……長崎市式見町  
<手熊>……長崎市手熊町  
<茂木>……長崎市茂木町  
<大崎>……長崎市大崎町  
<福田>……諫早市福田町  
<長崎>……旧長崎市  
<平戸>……平戸市  
<佐世保>……佐世保市  
<大村>……大村市

(昭和55年10月31日受理)